

---

# 顔面偏差値を 10 上げる方法

齊藤狐兎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

顔面偏差値を10上げる方法

### 【Zマーク】

Z02530

### 【作者名】

齊藤狐兎

### 【あらすじ】

いじめられて自殺するなんて甘えだ。

俺は前向きな自殺をする。不細工な自分と決別してイケメンとして生まれ変わらるのだ。

超絶不細工中野卓郎の魂がコンクリートジャングルを駆け巡る！

## 屋上からの眺め

はじめられて自殺する奴は本当に馬鹿だと感づ。

学校を変えるなり引っ越すなりすれば簡単に解決する話しだ。

僕が抱えてる苦闷に比べれば用とすっぽん、ゲームボーイとPS1  
Pへらいの違いがある。

隣の県の進学校に転校しようが、アメリカでトレーラー暮らしを  
しようが僕の悩みは解決しない。

所在地や所属する「HIC」ティとは全く関係がない僕の悩みとは  
超絶的な不細工であるところのことだ。

どれくらい不細工かといふと、悩みを相談した相手が無言で押し  
黙った末に「アメリカの整形ってすごいらしよ」とのたまつてしま  
うレベルである。

こんな悩みを相談されたら「そんなことないよ」とか「気にしすぎだよ」とか「精神を高め上げれば自ずと顔もそれ相応のものになるのよ」なんて言って励ますのが普通じゃないか。

アメリカの整形を勧められるつてどうこうことだよ。ちなみにそ  
いつは互いに唯一無二の親友でわざと人を傷つけようとするような  
人間じゃない。

最悪。つまり僕の顔は日本の整形技術じゃ太刀打ち出来ないほど

に最悪だと純ちゃんは判断したつてことなんだ。

もう嫌だった。誰かに顔を見られるのを恐れ、常にうつむき、帽子を被り、タモリさんみたいなサングラスをかけて生きてきた。

モグラのような生活は精神を蝕んだ。そんな折、太木和夫先生の本に出会った。

「輪廻転生入門」そして「輪廻転生実践編」

この二冊の本に僕は救われた。希望を見出した。輪廻転生に。僕は「来たあー」と叫んで両手を広げてみた。一昔前にみんなやっていたのを見てずっとやつてみたかったのだ。

きつい陽射しが僕の生白い顔を焼いた。十一階建てマンションの屋上が地上何メートルなのかわからなかつたが太陽に近いだけ紫外線も強いはずだ。

肺の空氣を全て口から吐き出した。

僕は今日生まれ変わる。ここから飛び降りるのだ。決して逃げやあきらめじゃない。あくまでもREBORN～再生のためだ。

父さん母さんが頭に浮かんだ。

母さんはいつもやさしかつた。父さんが厳しかつたのも僕を思つてのことだつてわかつてゐる。

一人は悪くない。悪いのは全て僕、の顔だ。

（お父さん、お母さん。先立つ不幸をお許しください。でも決して悲観的に捉えないでください。これはあくまでも旅立ちなのです。生まれ変わつたら、もう少しきれいな顔に生まれてきますのでまた機会があつたらお会いしましょう）

三十分かけて書いた遺書。

皮肉っぽいけど、素直な心情を書いただけで他意はまったくない。

逝こう。屋上の縁までゆっくりと歩いた。下を眺める。下校中の小学生が歩いている。カバンから突き出た縦笛を見て涙が出そうになる。

なにを悲しむことがあるんだ。生まれ変わつたら数年でああなるはずじやないか。

「ゲツツ！」

両手を拳銃のよつに前方に向けて叫んだ。

これもやりたかったけど出来なかつたことの一つ。最後に思い切りやつてやうう。

「ゲツツ！！ &ターン」

ぐるり回つたところでバランスを崩した。重心を後ろに傾けてなんとか留まる。

大きなため息が出た。

別に死ぬことをびびってるわけじゃない。心の準備体操つてやつ  
がまだ終わってない。。

「心の準備体操第一！ 大きく息を吸つて人生を回想しましょう」

教育テレビのお兄さんを意識して明るく言ってみた。

1、2、幼稚園で隣の寝ていた女の子が泣き出した。

3、4、学芸会の劇で最初から「プリン役に決まつてた。

5、6、小三なのに中学生料金取られた。

7、8、行事の度に顔のアップを撮られたけど、自分以外誰も買  
わない。

## 落下の結果は真赤赤

「ひいいいいいい」

思わず声を上げてしまった。良い思い出が一つもないじゃないか。でもそのおかげで心の準備が整つた。もうこの世に未練はない。空を見上げた。雲がひとつもなかつた。街を見ながら飛べたらどんなに気持ちがいいだろう。

頭に閃いたのは走り高跳びの背面飛びだつた。あれだつたら下を見ることなく落ちていけるし、なによりちよつとかつこいい。

落ち方が不自然だからつて他殺を疑われたりして。

最高だ。我ながらナイスな思いつき。

両手に唾を吐き、助走距離のため五メートルほど下がつた。

「松田翔太風に生まれ変わるんだあー！」

魂の叫びと共に駆け出す。

縁の五十センチほど手前でコンクリ床を強く蹴つた。体が宙に舞い建物の敷地から飛び出したところで僕は気づいた。

これじゃベリーロールだ。

頭から落下する。ジョンストンスターなんて比にならぬほど重量が頭を襲つた。

飛ぶ前は、アツという間に地面に呑きつかられるだらう、と思つていたがそれは違つた。

体感速度は驚くほどに遅く、10分の1でスロー再生してみると感じだつた。

試合中のキャプテン翼や幕ノ内一歩はこんな感じなんだろう。

ジワリジワリとアスファルトが近づく。

恐い。数秒後に訪れる苦痛を想像して体が震えた。

でも「」のまま生きていくほりがよっぽど苦しくて決まつてゐる。

そう考へると恐れが消えた。

「ママ、はやく~」

おもむろにマンションから子供が出てきた。まだ小学校にも上がるないうちの幼児。

幼児が上を見上げた。田がばつちりあう。幼児は呆けたように口を開けて驚いている。

最悪なことに幼児は僕が墜落するであろう場所に立つている。

やばい。このままじゃぶつかつてしまひ。

心だけはきれいでいよつと、十七年間清廉潔白を心がけて生きてきた。

だからこそ、このイケメン転生である。ここで幼児を巻き添えにしたらいケメンどころか地獄に落とされてしまうかもしれない。

必死で体を捻つた。しかし落下軌道は全く変わらない。

もう駄目だ。  
ぶつかる。

その刹那幼児が横に飛んでいった。

代わりに見たことのある男が衝突地点に現われた。

小麦色に焼けた肌に白光する並びの良い歯牙。鼻筋の通りは良く、快活に輝く瞳はきれいな一重一重一重一重一重一重一重一重。

小川俊樹！

小川の端正な顔が目の前に迫った。爆弾が破裂したような衝撃…

A 10x10 grid of black dots, representing a sparse matrix with 100 non-zero elements. The dots are arranged in a pattern that is mostly horizontal and mostly vertical, with some diagonal and anti-diagonal elements, creating a sparse triangular-like structure.

気がつくと僕は宙に浮いていた。死んでしまったのだろうか。

下を見ると何人も白衣を着た人間が顔の潰れた僕を蘇生させようと懸命に動き回っている。

「そんなに頑張らなくていいです」

始めるなりに言った。もし Irede 生を返つたりなんかしたらまたもんじやない。

「もう放つておいてくれ」

白衣軍団は一向に介することなく動き続けた。

僕の胸に注射したり電気ショックを『えたりしている。

見ていられなくなつて外へ出た。

出てすぐ左のソファーに父さんと母さんが寄り添つて座つていた。ハンカチを目に当てながらお互いの手を握り合つている。

キモイ。キモイキモイキモイ。申し訳ないけどキモイよ一人とも。

遺書見たんだろ。だつたら諦めてよ。

「僕はこれからイケメンに生まれ変わるんだから心配しないで」

耳元で母さんに言つたが反応はまったくない。

「なんだよこれっ」

大声が聞こえた。それは明らかに異質な声だつた。聴覚ではなく心臓に直接響いているような感じ。

呼ばれているような気がした。

声がした部屋に飛び込む。

そこに浮いていたのは頭を抱えた小川俊樹だつた。

なんと声を掛けでいいのかわからない。

まともに話したことがない一度もないのだ。

でも謝らなければいけないだろう。謝らなかつたせいでイケメンに生まれ変われないなんて事態になつたら大変だ。

「あの、」の度はどうも「愁傷をまでした」

「ん、あんた俺が見えるのか？」

小川が言った。目が血走つている。

「はい。だつて同じ……」

「なあ、なんで」こいつら俺のことシカトするんだ。なんで」こいつらを触るのとしたらすり抜けれるんだ」

小川が僕の肩を揺わぶつた。

「なあ、ベッドで死にかけてる」こいつは誰なんだ？」

小川の台詞に思わず固まつた。ひょっとして小川は……。

「なあ、俺は誰なんだ。なにがなんどうなつてるんだ。頼むから教えてくれよお~」



## スルースルーもシースルーの内

「それはつまり、その、なんというか、うん。多分、そうじゃないですかね」

「なにが言いたいのかまったく分からないよ」

「どういえばいいんだろう。「僕の自殺の巻き添えで死んでしまつたんです。すいません」なんて言って許してもらえるのか。

「くつそー。マジでなんなんだよ！」

小川が壁を拳で殴つた、が拳は壁に飲み込まれてなんの音も発生しない。

「なんでだよ。なんでなんだよ」

小川が医者の頭を殴りつけハイキックを叩き込んだ。しかし全て無駄。空気を混ぜただけだ。

息を切らした小川が僕をにらみつけた。

許してもらえそうな雰囲気はない。今にも殴りかかってきそうなオーラを出している。触れられることがない以上別に殴りかかってこられても問題はない。でも嫌じやないか。人に嫌われるって。

「なんとか言えやこりつー！」

小川のフックが降ってきた。僕は微動だにしない。当たるわけが

ないか。」

「ゴンッ」と音がして僕は後方へ飛んだ。

「なんで、なんでなの？」

小川と回りじりとを回つて、自分の氣づいて恥ずかしくなった。

「おまえは触れるんだな。言え。おまえが知つてゐること全部言え」

鼻が痛い。手をやると血がドクドクと流れていった。って、血が出でるつてどうことだよ。

「早く言わないともつかり殴るだ

小川が僕の胸倉をつかんで引っ張り上げた。無理矢理立たされる。

「おまえは誰だ。俺は一体何者なんだ。おいつー。」

揺ゆぶられて頭がガクガクした。

「僕は小川俊樹という中学生です。そしてあなたは僕のクラスメイトである中野卓郎です」

「つまり出た嘘だった。小川は驚いた表情で僕に詰め寄る。

「つまりあそこで寝てするのが中野卓郎、つまり俺なんだな

「ち、違います。あれは小川俊樹。僕の体です」

「でも顔が違ひじやねえか」

「今の姿は魂の顔。何百もの前世が重なりあつた顔なのです」

胸を張つて太木和夫の著書を引用した。

「じゃあ、中野卓郎はどこの人なんだよ」

僕は隣の集中治療室を指差した。

小川はなにも言わず隣の部屋へ飛んでいった。

悲鳴のような雄叫びが隣から聞こえた。

消沈した小川が戻ってきた。

「ひどい怪我だよね。顔なんてぐりやぐりやで。でも大丈夫だよ。最近のアメリカの整形はすごいから」

小川を慰めようと声をかける。

「……死んじやつたよ。俺、死んじやつた」

「死んだって！？ マジ？ やつたあ」

言葉に出してから過ちに気がついた。小川の顔色がまるまる変わつてゆく。

「なんで喜んでんだよ。おまえ人のこと馬鹿にしてんだろ」

小川が手を伸ばしてきたのでとっさに後ろに下がる。死人同士は接触可能で痛覚もあると分かつた以上、もう殴られるのはごめんだつた。

「待てよ。ぶつ殺してやる」

小川のフックが再びうなりをあげて襲い掛かってきた。一度も同じ技をくらう僕じゃない。ガードしてカウンターでアップバー・カットを叩きこむ、つもりだつたがガードごと飛ばされ小川に捕まつてしまつた。

「殺してやる」

小川が左手で僕の髪の毛を掴み右手で顔を殴りながら言った。

「もう死んでるよ」

僕は真実を返した。でも小川は止まらず拳を振るい続ける。

顔中が痛かつた。でも意識が遠のくような感覚はまったくなく、ただひたすらに泣きたくなるほど痛かつた。

「先生、クランケの様子が……」

看護婦の叫び声が耳に入つた。

「へへつ。おまえも死ぬみたいだな。ざまあみやがれ

憎まれ口を叩く小川の体が徐々に薄くなつていぐのに気づいた。体当たりしたら易々と後方に吹っ飛んでいった。

小川を捕まえる。

「てめえ、なんなんだこの野郎。やるなりやつてやるぞ。かかって  
こいや」

言われるまでもない。さつきやられたいことをそのままやり返した。

人を殴つたのは初めてだつたが、案外気持ちがいいものだつた。  
といつよつこいうしたい欲望をずっと抑えていたことに気がついた。

小川はひきゅつとかきやあとか言いながら血反吐を吐きまくり、  
一分と持たずに動かなくなつた。

でも僕は知つている。どんなに辛からうが意識を失うことはない  
ことを。

再び殴る。殴る殴る殴る。顔はむちむち、腹や肩。腕から脚まで  
いたる箇所を殴りまくつた。

小川は泣き叫び許しを乞つた。でも僕は止めない。もう止まらない  
かつた。

ヒュ――――

ガスが漏れるような音が部屋に響いた。途端に小川の体がどんどん  
細くなつてゆく。

バットほどの大きさになつた小川が隙をついて僕の脇の間から逃  
げていつた。

ベッドで治療を受ける小川に向かつた小川は、その口の中こひよろつと入つていつた。

僕は動物的な勘で口に入る寸前手を伸ばしていた。

バット状の小川の尻を捕まえる。

引き抜こうとしたら逆にすごい力で引っ張られた。

掴むといひもなければ踏ん張る地面もない。

力が一層強くなり、僕は尻を掴んだまま小川の口の中に吸い込まれていつた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0253o/>

---

顔面偏差値を10上げる方法

2010年10月10日11時00分発行